

## デカーの『欲望の支配、あるいは淫らな王妃』における スペインとモロッコとの関係

### —イングランドを取り巻く国際情勢から—

The Relation between Spain and Morocco in Dekker's *Lust's Dominion, or the Lascivious Queen*  
—From a Standpoint of International Situations Related to England—

石橋敬太郎\*  
Keitaro ISHIBASHI

Thomas Dekker's *Lust's Dominion, or the Lascivious Queen* was written in 1600. At the time of the play's composition and performances, Muly Ahmed al-Mansur, a king of Morocco, planned to conquer Spain. To achieve his plan, the Moroccan king was carrying on negotiations with Queen Elizabeth, trying to establish a full military alliance with England. While Queen Elizabeth's foreign policy was marked by increased ties with the Ottoman Empire as a means of resisting Spain, Morocco was fighting against the empire in Barbary in alliance with Spain. The result was that the England's confidence in Morocco was destabilized. This paper will illuminate anxieties about England's political and military relationship with Morocco by examining the anti-Morocco elements of the play in relation to events in the late Elizabethan reign.

**Keywords:** Islam, Morocco, Spain, Foreign Policy  
イスラム、モロッコ、スペイン、外交政策

#### 序

トマス・デカー作『欲望の支配、あるいは淫らな王妃』の執筆・上演時期（出版は1657年）を知るには、ローズ劇場の経営者であったフィリップ・ヘンズロウの『日記』が手掛かりになる。この日記では、『スペインのムーア人の悲劇』とタイトルがつけられているものの、一般的に本劇を指すとされている。また『日記』によると、ヘンズロウは、1600年2月13日にデカー、共作者のウィリアム・ホートンとジョン・デイにそれぞれ3ポンドの頭金を支払っている(131)。上演時期については、同年の6月にかけて上演されたという記録が残されている(Harrison III: 95)。ほかに、1600年8月にバーバリーの使節団がレコンキスタ以後、スペインを再征服しようとイングランドとの軍事的な同盟を求めて、モロッコ国王アフマド・アル・マンスールの使節ムハマド・アル・アンヌーリに導かれてロンドンに到着後も上演され続けたとする説もある(Brotton 272)。上演した劇団と劇場については、海軍卿一座、ローズ劇場とされている。本劇の資料としては、サー・トマス・モアの『リチャード三世の歴史』(1513)、エドワード・ホルの『年代記』(1542)、ラファエル・ホリンシェッドの『年代記』(1577、1578)、クリストファー・マーロウの『エドワード二世』(1591)、そして作者不詳の『スペイン国王フェリペ二世の病、最期の言葉と死』(1599)が考えられている(Wiggins IV: 206-210)。

ところで、本劇にはエリザベス女王の統治を脅かし続けたスペイン国王フェリペ二世と彼の王妃ユージニアのほか、実在するスペイン国王フェリペ三世と王女イザベラが登場する。そして劇中では、フェリペ二世に父親を殺害され、捕虜となったモロッコ王子エリエーザーがユージニアを愛人として、彼女の愛欲をもとに王位を狙うまでに権力を拡大するスペインの内政が描出されている(Floyd-Wilson 44)。その間、エリエーザーの妻マリアに横恋慕するフェルナンド（後のスペイン国王）や、ユージニアに思いを寄せる枢機卿メンドーサがエリエーザーのわなにかかって転落する場面が描かれる。最終的に、エリエーザーのもくろみは、フェリペ三世たちによって阻止され、ムーア人が王国内から追放されることで幕が閉じる。

劇中においてフェリペ三世など実在する人物が登場しているとはいえ、ムーア人エリエーザーや彼の妻マリアは劇作家の創造である。ちなみにフェリペ二世の王妃は、ユージニアではなく、神聖ローマ皇帝マクシミリアン二世の娘アナである。さらに、歴史ではフェリペ二世亡き後の王位は、フェルナンドではなく、唯一の男子相続人フェリペ王子に支障もなく継承された。従って、劇中で示されるアクションは全体として非歴史的である。言い換えるのなら、劇中ではフェリペ二世の死の間際からフェリペ三世の王位継承にいたるスペイン宮廷を舞台として、王位を狙うムーア人と、彼に敵対する貴族との闘争が描かれている。本劇の表題が示すように、ユージニアのエリエーザーに

\* 国際文化学科

対する淫らな愛欲がスペイン宮廷の混乱を引き起こすアクションの展開は、反スペイン感情を抱く当時の観客の興味をそそったことであろう。

本劇に関する批評に目を向けてみると、その主なものは次のようになる。フレッドソン・パワーズ(Fredson Bowers)は、ムーア人エリエーザーの王位を狙う陰謀のなかに、クリストファー・マーロウの『マルタ島のユダヤ人』に登場するマキアヴェリ的な悪党バラバスの影響を見てとる(272-73)。G. K. ハンター (G. K. Hunter) は、王妃ユーージニアとエリエーザーの性的な感溺がスペインの長子相続権に基づく王位継承を覆す恐怖を見出している (473)。主人公の悪党性を論じた論考のほかにも、イングランドに居住するムーア人の国外追放令が広く執行されていた時期に、本劇が執筆・上演されたことに着目した批評もある。たとえば、エミリーC. バーテルズ(Emily C. Bartels)は、終幕においてスペインの新国王フェリペ三世によってムーア人が宮廷から追い払われる物語を、ムーア人を国外追放とするイングランドの政策と関連づけて議論を展開する(118-19)。

これらの批評は正しいと思う。それにしても、実在するスペイン国王フェリペ三世はもちろん、当時複雑な外交関係にあったモロッコのムーア人という、ときのイングランド人が関心を寄せていた両国の人物が登場する設定は、どのように考えたらよいのであろうか。イングランドとモロッコとの関係については、1550年代、イングランド商人が砂糖、ナツメヤシの実やアーモンドなどを求めた輸入貿易から始まった。エリザベス女王は、歴代のモロッコ国王ムレイ・マハメット、ムレイ・アブデルマルクやアフマド・アル・マンスールに積極的に書簡を送り続け、同国との協力関係を推進した。もちろん、エリザベスがモロッコとの経済的な関係をカトリックのスペインに対抗するための戦略的な目的に利用したことは繰り返すまでもない。とりわけ、1588年のアルマダ撃滅から90年代前半にかけて、両国の経済的、政治的な結びつきは最高点に達していた。なかでも、火薬の原料となる硝石の輸入と引き換えに、イングランドは、鎧、弾薬、船舶の材料となる木材や大砲用の金属をモロッコに輸出するまでにいたった (Bartels 24-25)。

ところが、イングランドがモロッコに軍事的な協力を求める政策は、1596年にエリザベス女王がイングランドに居住するムーア人の増加に対して枢密院に対応を迫り、彼らの国外追放を命じたことから翳りを見せ始める(Harrison II: 109,111)。その理由として、この頃、モロッコがバーバリー地域でのトルコ勢力を払拭するために<sup>1</sup>、スペインと友好関係を結ぶことに腐心していたことが考えられる。それも、対スペイン外交上、エリザベスがトルコ国王ムラト三世やメフメド三世、そしてメフメドの母サフィに商業的、軍事的な協力を求めているのを知っていることである。しかも、モロッコは、トルコを同盟国としていたはず

である。モロッコの外交政策は、モロッコやトルコとの軍事的協力をもとにスペインを打ち倒そうとするイングランドの外交戦略に反するものであった。

ほぼときを同じくして、モロッコ国王アフマド・アル・マンスールは、イングランドから軍事的な協力を得て、スペインを再征服しようと目論んでいた。このような国際情勢を文脈とすると、フェリペ二世の病死からフェリペ王子の王位継承にいたるスペイン宮廷内の権力闘争に乗じて、同国を再征服しようとするムーア人エリエーザーの野望は、本劇が執筆・上演された時期のモロッコ国王のそれを垣間見せる。こうした外交事情がデカーの関心をスペインとモロッコとの関係に向けさせたのではなかろうか。そして、暴力と策略によって王位を狙うムーア人の残虐な行為を描出することによって、エリザベス政府の思いとは裏腹に、モロッコを信用に値しないパートナーとして訴えることが劇作家の目的であったように思われる。

事実、終幕においてムーア人に変装し、顔を黒く塗ったフェリペたちのわなにかかってエリエーザーが転落する場面が描かれる。本劇を当時の国際情勢に位置づけて読み直すと、もうひとつ見逃せないのは、フェリペが変装したまま王位に就くほか、エリエーザーとの淫らな愛欲からスペインを混乱に陥れたあげく、一度は王位継承権をムーア人に譲渡したユーージニアを問題もなく許してしまうことである。新国王フェリペ三世にはムーア人の残像が色濃く残る。本稿の目的は、デカーの『欲望の支配、あるいは淫らな王妃』を執筆・上演された時期のイングランドを取り巻く外交政策に位置づけて、モロッコを政治的に信用できないパートナーであること、そして先行き不透明なモロッコとスペインの協力関係を劇中に見出すことである。

## I

開幕すると、バーバリーとフェスの王子で、スペイン国王フェリペ二世の捕虜とされているムーア人エリエーザーが王妃ユーージニアをともなつて登場する。彼が宮廷で受け入れられているのは、両国の大敵トルコとの戦いにおいて功績を挙げ、フェリペ二世の寵愛を浴びていたことによる。そして、フェリペ二世が病床中に行われているエリエーザーと王妃との情事は、宮廷内で暗黙に了承されている。二人の淫らな関係は、フェリペ王子がポルトガルから戻るまで罰せられることはない。それ以上に興味深いのは、宮廷人から「悪魔」「バーバリーの奴隷」「犬」などと評されるエリエーザーがスペイン貴族アルヴェロの娘マリアとの結婚によって、宮廷内で揺るぎない地位を占めていることである。言い換えるのなら、エリエーザーは、スペイン人との結婚によってキリスト教コミュニティのなかで存在の基盤を与えられている。このことについて、彼は次のように言う。

<sup>1</sup> バーバリー地域とは、チュニス、アルジェやトリポリを含む北アフリカのオスマン・トルコ摂政管区、および同国の勢力から独立・自治を維持してきたモロッコ王国を指す。

Although my flesh be tawny, in my veins,  
Runs blood as red, and royal as the best  
And proud'st in *Spain*, there do's old man:

(I. i. 154-56)<sup>2</sup>

しかし、あれほどムーア人との協力関係を強固に築き、トルコに対抗してきたフェリペ二世がこの世を去ると、宮廷人の間でムーア人追放の問題が生じる。劇中では、史実を離れて、フェリペ王子の兄弟フェルナンドが国王となり、枢機卿メンドーサが摂政に任命される。ポルトガルから帰国したばかりの王子フェリペは、王妃とエリエーザーが国庫を仮面劇と宴会に浪費したことを強く非難する。そして、エリエーザーの権勢に不満をもつフェリペや枢機卿たちは、彼の国王にも似た特権を奪い取るほか、宮廷からの追放を命じる。スペイン貴族によるムーア人追放命令に対して、アルヴェロは、自身も宮廷を追われるであろうことに不安を覚える。事態を解決すべく、エリエーザーの妻 MARIA はフェルナンドに助けを求める。このとき、彼女に横恋慕するフェルナンドは、自身の言葉が法であるとしてエリエーザー追放を取り消す。これに対して、枢機卿は国王にまさる教皇の権威をたてに国王に対抗する。

スペインでは、権力者の言葉が法として認められている。前の場面において、王妃ユージーニアが追放を命じられたエリエーザーに裁判の機会を枢機卿に求めても、権力者の言葉が法にまざっていた。後になってわかるように、フェルナンドは、枢機卿から摂政職を奪い取り、それをエリエーザーに与える。枢機卿にしても、スペイン人の忠誠を国王ではなく、教皇に誓わせる勅書を送らせると、王弟フェリペとともに彼に対する敵意をあらわにする。

King, thou shalt be no King for wronging me.  
The Pope shall send his bulls through all thy Realm,  
And pul obedience from thy Subjects hearts,  
To put on armour of the Mother Church:  
Curses shal fal like lightnings on your heads,  
Bell, book and candle, holy water, praiers,  
Shal all chime vengeance to the Court of *Spain*  
Till they have power to conjure down that feind;

(II. i. 44-51)

争う宮廷人を和解させるには、ユージーニアが彼女に思いを寄せる枢機卿を利用するより方法はない。これらの場面は、フェリペ二世の時代にネーデルラントの反乱などに対処するための軍事支出による王室財政の破綻を回復するため、貴族爵位、官職や領主権の売買など衰退し始めたスペインの内政を映し出しているように思われる。事実、スペインは、少数の寵臣に政治

を委ねた結果、内政的に弱体化に向かっており、倫理的にも墮落していた。フェリペ三世が王位に就く頃には、宮廷は、政治的に決して有能ではない主席大臣レルマ公爵に操られる官僚の集まりと化していたのである (Phillips Jr. and Rahn Phillips 205)。こうした実情が、権力欲だけが横行し、愛欲や政治的共謀に引き裂かれるスペイン宮廷をデカーに描かせたのではなからうか。愛欲と裏切りに満ちたスペイン宮廷というセンセーショナルな設定はまた、すでにヴァージニア・メイソン・ヴォーガン (Virginia Mason Vaughan) が指摘したように、同国人に対する当時の観客の偏見を満足させるのに十分であったのかもしれない (55)。

## II

ところで、劇中で父王の捕虜として社会の周縁に位置づけられているエリエーザーが抑圧からの解放とスペイン再征服を夢見て、宮廷内で勢力を拡大していく背景には、1598 年のフェリペ二世の病死を契機として、イングランドとの軍事的な協力のもと、レコンキスタ以来のスペイン再征服をもくろむモロッコ国王アフマド・アル・マンスールの野望があったように思われる (MacLean and Matar 52)。事実、カトリック教への改宗に不満を抱くスペインに居住するムーア人たちは、ムスリム軍によるスペイン征服が世界の終わりの序曲になるという至福千年観を宣伝していた (Hess 1-21)。これを実現しようと、すでにアル・マンスールは、スペインからの亡命者に同国によって占領された北アフリカの都市セウタ攻撃を促していた。彼の計画は、神とイスラム兵士とともに、海路でスペインを横断し、信仰の基盤を確立して、スペインを不信者の手から開放することであった。さらに、イングランドとの軍事的協力を求めて、1599 年の夏に、イングランド商人でバーバリー地域のスパイであったジャスパー・トムソンとアル・マンスールの式武官アル・カイド・アズーズとの間で秘密の会談がもたれた。

この会談のなかで、アズーズは、エリザベス女王が 2 万人のイングランド人兵士とバーバリーからの 2 万頭の馬と兵士をもって、スペインを侵略する意思があるかどうか、トムソンに聞いている。この問いに対して、トムソンは、これを議論するにはアル・マンスールがイングランドに大使を送るべきと回答した (Matar 24-25)。そして、この問題を公式に協議するために、ムハマド・アル・アンヌーリに導かれたモロッコ国王の使節団が 1600 年 8 月にロンドンに到着した。その様子は次のようなものであった。

There are newly come to London Muly Hamet Xarife, secretary and principal ambassador from the King of Barbary, and with him in commission two merchants, bearing letters for her Majesty. They were met at Dover by Sir Thomas Gerrard, the Knight

<sup>2</sup> 以下、デカーからの引用および幕場行数すべては、Fredson Bowers ed., *Lusts Dominion; or, The Lascivious Queen, A Tragedie* in

*The Dramatic Works of Thomas Dekker*, Vol. IV (Cambridge: Cambridge UP, 1968) に拠る。

Marshal, and divers gentlemen, and are now lodged at the house of Alderman Ratcliffe, near to the Royal Exchange. They speak by a Spanish interpreter. They are tawny Moors, very strangely attired and behaved.

(Harrison III: 104)

この記録から、エリザベス女王宛の書簡を携えた使節団が褐色の肌の色をしたムーア人で、奇妙な服装をして振舞っていたことに対するイングランド人の不安がうかがえる。その理由として、スペインからの脅威を払拭するために、トルコから軍事的な支援を得ていたイングランドにとって、劇中のムーア人と同様にトルコを敵とみなすモロッコの要請は容易に受け入れがたいものであったことが考えられる(Brotton 262)。それに、イングランド人にとって脅威であったフェリペ二世もすでにこの世を去っていた。本当に、イングランドはモロッコとの軍事的協力を継続すべきなのであろうか。このような思いがエリザベス政府内から聞こえてきた時期のことである。

ここで着目すべきは、アル・マンスールのスペイン再征服というトピカルティを枠組みとして、フェリペ二世とフェリペ三世の継承の間に作り出された非歴史的な演劇空間のなかで、王妃との性的な関係を政治的な権力に変えて王位を狙うエリエーザーとスペイン人との力関係が描出されていることである。その手始めとして、エリエーザーは、王弟フェリペが非嫡子であるという偽の情報を触れまわよう聖職者コールとクラブに命じる。また、彼は家臣バルタザーとザラックに枢機卿メンドーサ暗殺をほのめかす。これらの計略を前にして、フェリペや枢機卿は聖職者の手を借りてポルトガルへ逃亡せざるをえない。

後に続く場面で示されるのは、情欲に駆り立てられたスペイン人がエリエーザーのわなにかかり、ムーア人に支配される宮廷である。すなわち、エリエーザーを独占したいと考えるユージニアは、フェルナンドの情欲から免れるために眠り薬で彼を眠らせただけのマリアに王殺害の濡れ衣を着せて、彼女を殺害する。そして、エリエーザーは、妻を殺害したのがフェルナンドであると決め付けて、眠りから覚めたばかりの彼を殺害する。王位が空白となった今、王妃は、王弟フェリペの父親が前国王ではないことを理由として、エリエーザーをスペイン国王とする。王妃は、宮廷人の前で次のように述べる。

But I for love to you, love to fair *Spain*,  
Choose rather to rip up a Queens disgrace,  
Then by concealing it to set the Crown  
Upon a bastards head. Wherefore my Lords  
By my consent crown that proud Blackamore;  
Since *Spains* bright glory must so soon grow dim,  
Since it must end, let it end all in him [Elezar].

(III. ii. 229-35)

これらの場面は、スペイン貴族の愛欲にまみれた権力闘争に乗じて、同国を再征服しようとするムーア人の力、あるいは彼らの夢を観客に強く印象づけるのに十分であったように思われる。もうひとつ重要なことは、宮廷がエリエーザーを国王として認める貴族と、これに異議を唱えるロダリーゴやクリストフェロたち貴族とに分裂することである。先にエリエーザーを擁護していたアルヴェロも、国王を殺害した人物が王位に就くことに猛然と反対する。そして、フェリペを庶子として平民に訴え続ける二人の聖職者がムーア人に銃殺されたとき、平民は両派に分かれて暴動を起こし始める。エリエーザーを支持する人たちは、ムーア人がスペインの敵トルコとの戦いのほか、ナポリ回復に貢献したことを知っている。このようなムーア人との軍事的協力関係は、スペイン人にとって決して無視できない同国の現実を物語っていたであろう。現にトルコに対抗するスペインにとって、モロッコは世界支配を推進するうえで必要な存在であったのである。

### III

本劇が執筆・上演された時期と同じように、内政的に没落し始めたが、対トルコ外交上、依然としてモロッコとの協力関係が求められているスペインという演劇空間のなかで、宮廷内のムーア人とスペイン人との闘争は内乱へと展開する。圧倒的なムーア人の勢力は、スペインの友好国ポルトガルをも震撼させる。ポルトガル国王エマヌエルは、「哀れなスペインよ、野心に満ちたムーア人によって、その平和な身体がなんてずたずたに引き裂かれていることか」(“Poor *Spain*, how is the body of thy peace / Mangled and tom by an ambitious Moor!”) (IV. i. 1-2) と叫ぶだけで、ムーア人の野望に手も足も出せない。

How is thy Prince and Counsellors abus'd,  
And trodden under the base foot of scorn:  
Wrong'd Lords, *Emanuel of Portugal* partakes  
A feeling share in all your miseries:

(IV. i. 3-6)

しかしながら、この戦いでは、結果としてムーア人は敗走を余儀なくされる。この形勢不利な状況にあっても、エリエーザーは、王妃に思いを寄せる枢機卿メンドーサを利用して、彼に武装解除させる。そして、エリエーザーは枢機卿に反乱の首謀者としてフェリペを大逆罪で逮捕させる。彼の恐るべき支配欲は、ユージニアとはかり、フェリペの父親であることを偽証させた枢機卿を強姦罪で投獄したうえ、さらに王妃を裏切って不貞の罪で彼女を投獄するほか、王女イザベラを即位させようと、アルヴェロの息子で彼女の婚約者ホーテンゾを地下牢に投獄するまでにいたる。そして、エリエーザーの野望は、王位を確かにするためにイザベラに求婚するときクライマックスを迎える。

Mark: the imperial chair of *Spain*,  
Is now as empty as a Misers Alms;  
Be wise, I yet dare sit in't: It's for you,  
If you will be for me, there's room for two.  
Do, meditate, muse on't: it's best for thee  
To love me, live with me, and lye with me.  
(V. ii. 98-103)

このような野蛮で策略に満ちたエリエーザーの支配欲は、すでにジェリー・ブロットン(Jerry Brotton)が指摘したように、ジョージ・ピール、ロバート・グリーン、トマス・キッドやクリストファー・マーロウの描くムーア人ないしトルコ人を題材とした演劇の再現のように思われる(272)。たとえば、ピール作『アルカザールの戦い』(1589)において、前モロッコ国王の息子ムレイ・マハメットは、自身の兄弟と叔父ムレイ・アブデルマルクの兄アブデルムネンを殺害して、王位を篡奪した。ジョナサン・ベイト(Jonathan Bate)によると、徹底的に血に飢えた暴君としてのマハメットの人物造型は、その後のムーア人表象を決定づけた(14-15)。確かにそうなのだが、自らの利益のためには、策を弄して次々と味方を変えるエリエーザーの手口のなかに、王国の安定拡大を目的として、トルコによるバーバリー支配を一掃するためにはスペインと手を組み、また新たな展望を見出せないフェリペ二世亡き後の内政に乗じて、スペイン征服のためにはイングランドとの軍事的協力を求めたモロッコ国王アフマド・アル・マンスールの外交戦略を見る思いがする。

そうだとしたら、暴力と陰謀によって王位を手に入れるエリエーザーの手段を見せつけられた当時の観客のなかで、どれだけムーア人を信用できるパートナーとして受け入れる人たちがいたであろうか。劇作家の目的は、ムーア人あるいはモロッコを政治的に信用できないパートナーとして観客に訴えることであったように思われる。本劇が上演された後のことになるが、モロッコの使節団がスペイン再征服のためにエリザベス女王に軍事的協力を求めた会談を終えて帰国するとき、イングランド商人たちが彼らの訪問の目的を商業上のスパイ行為と疑問視していたこと、また彼らの訪問を好ましく思っていなかったことは、モロッコの外交戦略に対するイングランド人の思いを伝えてくれる(Harrison III :123)。

しかし、権力争いだけが横行し、弱体化しつつある劇中のスペインとは裏腹に、本劇が執筆・上演された時期、イングランドが同国に対して依然として脅威を感じていたことは確かであろう。事実、スペインは、アイルランドで生じているタイロン伯ヒュー・オニールの反乱を支援し、着々とイングランド征服の足場を築いていた。1599年、この反乱を鎮圧するために、モロッコからの支援が急務であると、エリザベス女王は考えていたが、エセックス伯ロバート・デヴァルーがアイルランドに遠征した。結果として、彼の遠征は不首尾に終わった。この時点で、エリザベス政府は、すでにイングランドの軍勢力が枯渇していることを認識していた(MacLean and Matar 57)。しかも、フ

ェリペ二世は死の間際に、息子のフェリペ王子に自身がこうむった不名誉に復讐を終えるまで決してイングランドと和平を締結しないよう誓わせたと言われている(Harrison III:221)。迫り来るスペインの脅威を打開するために、イングランドではスペイン王女イザベラを王位に就け、同国との和平を模索する動きが現れ始めた。これをスペインによるイングランド支配の危機として、エセックス伯たち好戦主義者が猛然と反対したことは言うまでもない。

#### IV

底知れぬスペインの脅威あるいは計略を例証するかのようには、劇中では王女イザベラが、宮廷内で地位を与えることと引き換えにエリエーザーの家臣ザラックにフェリペとホーテンズを地下牢から救済するように懇願する場面が作り出される。続く場面においてイザベラは、救出されたフェリペたちにムーア人の衣服を着て、「地獄のオイル」(“the oil of hell”) (V. ii. 171) で顔を黒く塗り、エリエーザーを待ち伏せするように指示する。一方で、首尾よく終わりそうな復讐に恍惚としているエリエーザーは、敵を殺害する劇中劇を始める。そのなかで、彼は、フェリペとホーテンズが変装していることを知らず、彼らを相手に枢機卿メンドーサの役を演じる。

Well Zarack I'll unfix thee first of all,  
Thou shalt help me to play the Cardinal;  
This Iron engine on his head I'll clap,  
Like a Popes Miter, or a Cardinals Cap.

(V. iii. 95-98)

続いて、ザラックと思い込んでいたフェリペに手かせをかけさせた後、正体を暴露した彼によって、エリエーザーは殺害される。最終的に観客が見たものは、策略にかけてはムーア人よりはるかに上手なスペイン人であったであろう。それにしても、エリエーザー殺害後も、ムーア人の衣服を着て、顔を黒く塗ったままフェリペがスペイン国王として王位を継承するのはどうだろう。しかも、フェリペは、エリエーザーとの淫らな愛欲からスペインを混乱に陥れたあげく、一度は王位継承権をムーア人に譲渡した母親を問題もなく許してしまう。もちろん、これらの出来事は史実にはない。王位に就いたばかりのフェリペは、次のように述べて幕を閉じる。

And for this Barbarous Moor, and his black train,  
Let all the Moors be banished from *Spain*.

(V. iii. 182-83)

前に述べたように、本劇は、イングランドから「肌の黒いムーア人」の追放を求めるエリザベス女王の布告が広まっていた時期に上演された。また、後の1609年に、スペイン国王フェリ

ペ三世は、容易にキリスト教に改宗しないムーア人を王国内の敵とみなして、公式に彼らをスペインから追放する(Kamen 202-203)<sup>3</sup>。繰り返しになるが、このことから、本劇はエリザベス女王やフェリペ三世のムーア人追放政策を背景として執筆されたと考えられてきた。たとえそうだとしても、追放令を出したとはいえ、変装したまま、幕を閉じるフェリペ三世にはムーア人の残像が強く残る。この残像は、スペインとモロッコとの協力関係が決して断絶されないことを暗示しているように思われる。

実際、スペインとオスマン・トルコとの間に休戦協定が成立していた時期のバーバリーを含むオスマン摂政管区に目を向けてみると、トルコ勢力を払拭しようと反乱を起こすモロッコに対して、スペインは支援を行い始めていた。1581年以降、断続的にこれら東西両大国間に休戦協定が締結されていたことからすれば、世界支配をもくろむスペインにとり、モロッコの反乱が自国に有利にはたらいっていると認識したであろう<sup>4</sup>。このような国際情勢を背景とすると、劇中においてエリザベスを殺害した後も、ムーア人に変装したままのフェリペの登場は、スペイン人とムーア人との協力関係が継続されることを暗示していたと解釈できる。歴史では、モロッコを政治的に信用できないパートナーであるとして、イングランドとモロッコとの軍事的な協力関係は結ばれなかったことからすると、劇中には当時のイングランド人のモロッコ人に対する不信感と、イングランドを取り巻く先行き不透明なスペインとモロッコとの関係が描かれていたと考えられる。

その後、イングランドがモロッコとの軍事的な同盟を求める政策は、エリザベス女王の王位を継承したジェームズ一世が国王秘書長官ソールズベリー伯ロバート・セシルに導かれてスペインと和平交渉を始めたことで大きな変化を迎えた。すなわち、プロテスタント国としてのイングランドの権利をヨーロッパ諸国に認識してもらい、外交上の孤立を終わらせるのがジェームズの望みであった。それに、この新国王は、ムーア人あるいは彼が「信仰心のないトルコ人」と呼んでいた人たちとの同盟を結ぶことに関心もなかった。スペインのフェリペ三世にしても、カトリック教を守るための対外戦争によって王国内の財政基盤がすでに崩壊しているのを知っていた。イングランド征服を駆り立てる大臣たちの傍らで、イングランドとの和平を求める声もレルマ公爵と彼の支持者から聞こえ始めてきた(Feros 149)。

そして、1604年の夏、スペインとイングランドの外交官は、ロンドン協定に署名をし、1588年に生じたアルマダ戦争以来続いていた両国間の戦争を終わらせた。スペインとの和平条約が

締結されたことにより、イングランドとモロッコとの軍事的な協力関係も終焉を迎えることになる。その結果、ジェームズ一世の治世においてイスラム世界を描いた演劇作品は新たな相貌を見せ始めることになる。たとえば、ウィリアム・ダボーン、トマス・ゴフやフィリップ・マッシンジャーは、それぞれの作品においてイスラム教に改宗したキリスト教徒あるいはイスラム教徒に改宗したキリスト教徒の再改宗といった問題をクローズアップすることになる。

## Works Cited

- Bartels, Emily C. *Speaking of the Moor From Alcazar to Othello*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2008.
- Bate, Jonathan. "Othello and Other-Turning Turk: The Subtleties of Shakespeare's Treatment of Islam." *Times Literary Supplement* 19, 14-15, 2001.
- Brotton, Jerry. *The Sultan and the Queen: The Untold Story of Elizabeth and Islam*. New York: Viking, 2016.
- Feros, Antonio. *Kingship and Favoritism in the Spain of Philip III, 1598-1621*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Floyd-Wilson, Mary. *English Ethnicity and Race in Early Modern Drama*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Harrison, George Bagshawe. *Elizabethan and Jacobean Journals 1591-1610*. Vol. II and III. London and New York: Routledge, 1933, 1999.
- Henslowe, Philip. *Henslowe's Diary*. Second Edition. Ed. R. A. Foakes. Cambridge: Cambridge UP, 2002.
- Hess, Andrew. C. "The Moriscos. An Ottoman Fifth Column in Sixteenth-century Spain." *American Historical Review*, 74 (1968), 1-21.
- Hunter, George Kirk. *English Drama 1586-1642: The Age of Shakespeare*. Oxford: Clarendon P, 1997.
- Kamen, Henry. *Spain, 1469-1717: A society of conflict*. London and New York: Routledge, 2014.
- MacLean, Gerald and Nabil Matar. *Britain and the Islamic World, 1558-1713*. Oxford: Oxford UP, 2011.
- Matar, Nabil. *Britain and Barbary, 1589-1689*. Gainesville: UP of Florida, 2006.
- Phillips Jr., William D. and Carla Rahn Phillips. *A Concise History of Spain*. Cambridge: Cambridge UP, 2017.

<sup>3</sup> イスラム起源のムーア人—いわゆるモリスコ—をスペインから追放すべきとする提案は、すでに1582年の国家評議会で承認されていた。しかし、モリスコがスペインにとって貴重な労働力であることなどから、当初、アラゴンやヴァレンシア地方の貴族など彼らの追放に反対する人々が多数いた。また、フェリペ三世の寵臣レルマ公爵と国王聴罪司祭は、バーバリーに追い払われたモリスコの逆襲を恐れ、彼らの追放を容易に受け入れなかった。ムーア人追放が1609年に正式に決定した理由とし

て、カトリック教に改宗することを拒否する彼らの言動が、影響力のあるヴァレンシア大司教ジュアン・ド・リベラによってスペイン敵視とみなされたことによる。

<sup>4</sup> 本劇が執筆・上演されたおよそ2年後の1602年10月、スペインは、同国に軍事的な協力を求めるモロッコ国王アフマド・アル・マンスールの要請に正式に応じた (MacLean and Matar 59)。

Vaughan, Virginia Mason. *Performing Blackness on English Stages, 1500-1800*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.

Wiggins, Martin. *British Drama 1533-1642: A Catalogue*. Vol. IV. Oxford: Oxford UP, 2014.

\*本稿は、第 56 回シェイクスピア学会（平成 29 年 10 月 8 日、近畿大学東大阪キャンパス）セミナー1「トマス・デカーの作品とその時代性」（コーディネイター、石橋敬太郎）において口頭で発表した原稿に加筆・修正を施したものである。セミナー当日にいたるまで各メンバーから貴重なご意見や助言をいただいた。ここに、メンバーの氏名を記して感謝を表したい。勝山貴之氏（同志社大学）、佐野隆弥氏（筑波大学）、檀浦麻衣氏（学習院大学）、本多まりえ氏（明治学院大学）。なお、本稿は、平成 30 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（c））（課題番号：17K02532）の成果の一部である。